

松尾寺遺跡初の発掘調査で平安時代に遡る遺構を確認 発掘調査の成果について

府指定文化財である松尾寺仁王門の修理事業に伴って実施した松尾寺遺跡初の発掘調査で、平安時代から江戸時代にかけての遺構・遺物を確認しましたので、調査成果についてお知らせします。
西国三十三所観音霊場である松尾寺と舞鶴の歴史を考えるうえで貴重な成果となりました。

○調査概要

遺跡名	松尾寺遺跡
調査場所	舞鶴市字松尾地内（松尾寺境内 仁王門）
調査期間	令和2年12月3日～1月15日
調査面積	約60㎡
調査主体	舞鶴市（文化振興課）
調査原因	仁王門修理のための基礎工事に伴う地下遺構の確認調査
確認された時代	平安時代～江戸時代
出土遺物	土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、瓦質火鉢、陶磁器、鉄製品、金貨・銀貨（元禄二朱判金1点、元禄豆板銀1点）寛永通宝 等 整理コンテナ5箱分（出土遺物点数約550点）
検出遺構	整地層・参道跡、基壇跡、旧仁王門礎石抜き取り跡、石列、柱穴 等

○報道関係者向け現地レク

- (1) 日時 令和3年1月20日 10時～11時
- (2) 場所 発掘調査現場（別紙地図）
- (3) 内容 発掘調査成果の概要説明と出土遺物の説明を現地で行います。

※一般向け現地説明会については、発掘現場が狭いため、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を鑑みて実施しません。

資料を郷土資料館で配布するほか、写真と説明資料を市ホームページに掲載します。（1月20日掲載予定）

【お問い合わせ先】

文化振興課 担当：長嶺、松崎
☎0773-66-1019/FAX0773-62-9891
e-mail:bunka@city.maizuru.lg.jp

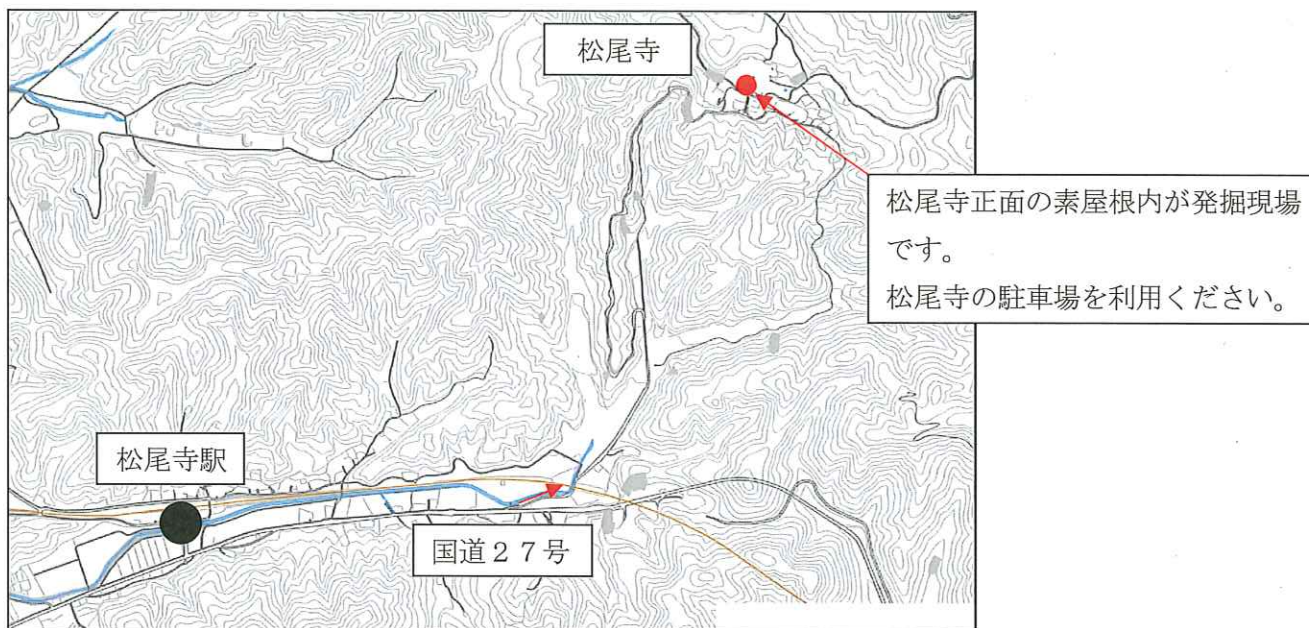
○調査結果 . . . 詳細別紙資料

要点

- 今回の調査地点では平安時代初頭（9世紀）に整地され、土地利用が開始されたことが分かった。
- ☞ 松尾寺の創建年代を考える上で古代に遡る遺構が確認できたことは重要。
- 平安時代後期にかけて建物基壇（基壇跡1a）が造成される等、境内の整備が行われたことが分かった。
- この基壇跡1aは改修されながら中世以降も引き継がれ、江戸時代前期頃まで機能（基壇1b）していたことが分かった。
- ☞ 歴代の山門がこの位置に建てられていた可能性が考えられる。
- その後、基壇跡1bは南側の崖崩れ等で失われ、江戸時代中期に本堂寄りに位置をずらして旧仁王門、現仁王門が建立されたと考えられる。
- 中世から江戸時代にかけて、参道跡と推定される精緻な整地が繰り返されていることが分かった。
- ☞ 特に中世以降に盛んになった西国三十三所巡礼の隆盛や、歴代領主等の帰依を受けて発展した松尾寺の歴史が整備の頻度から伺える。
- 今回の松尾寺初めての発掘調査では、9世紀頃に土地利用が開始されて以降、平安時代後期にかけて建物基壇が造られる等整備が進み、旧仁王門を経て現仁王門の建立に至る調査地点の一連の変遷を明らかにすることができた。

西国三十三所の札所として発展し、今なお多くの巡礼者が訪れる松尾寺の歴史は舞鶴の歴史にとっても特徴的なもの。今回の調査を契機として、今後の調査研究による更なる松尾寺の歴史の全容解明が期待される。

（現地レクの場所）



【お問い合わせ先】

文化振興課 担当：長嶺、松崎
☎0773-66-1019/FAX0773-62-9891
e-mail:bunka@city.maizuru.lg.jp

松尾寺遺跡発掘調査成果（概要）

■調査概要

遺跡名	松尾寺遺跡
調査場所	舞鶴市字松尾地内（松尾寺境内 仁王門）
調査期間	令和2年12月3日～1月15日
調査面積	約60㎡
調査主体	舞鶴市（文化振興課）
調査原因	仁王門修理のための基礎工事に伴う地下遺構の確認調査
確認された時代	平安時代～江戸時代
出土遺物	土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、瓦質火鉢、陶磁器、鉄製品、金貨・銀貨（元禄二朱判金1点、元禄豆板銀1点）寛永通宝 等 整理コンテナ5箱分（出土遺物点数約550点）
検出遺構	整地層・参道跡、基壇跡、旧仁王門礎石拔取り跡、石列、柱穴 等

■はじめに

今回の調査は、松尾寺の山門である仁王門（府指定文化財）の解体修理に伴って、地下の遺跡に影響が及ぶ範囲について調査を実施したものです。松尾寺遺跡では初めての発掘調査となります。現仁王門の前身の門の存在や、古代や中世に遡る境内の様子、松尾寺の歴史を明らかにすることを目的に調査を行いました。

検出した遺構を年代順に紹介します。

①平安時代初頭（9世紀）

整地層

遺跡の最下層で整地された地面を確認しました。また、整地された地面の東西にはそれぞれ落込みが確認されました。この地面で出土した須恵器や土師器の年代から、整地層は9世紀頃のものと考えられます。整地された地面は南北方向に続いており、通路のような機能をもっていた可能性があります。今回の調査地点では、この時期に何らかの土地利用が開始されていたことが分かりました。

②平安時代前期～後期

基壇跡 1a

①の整地面直上で、東西に並ぶ石列と平安時代後期にかけての遺物を包含する土層を確認しました。石列の大部分はすでに石材が抜き取られて残っていませんでしたが、一部石列が残存していた部分では、石列から南側が盛土で造成され土壇になっていることが分かりました。この土壇には建物の礎石拔取り跡と推定される遺構も確認できることから、建物に伴う基壇跡（基壇跡1a）と考えられます。基壇の規模は東西方向約9.5mです。調査区南側にさらに続いており、南北方向の規模は不明です。現仁王門の基壇（東西方向約11m）よりやや小さい規模となります。

基壇が造成された時期は明確には分かりませんが、平安時代後期にかけて造成されたと考えられます。

③鎌倉時代～江戸時代前期

参道跡

鎌倉時代から江戸時代前期にかけて、参道跡と考えられる精緻な整地が少なくとも4回以上繰り返されていることが分かりました。西側に落込みがあり、参道脇の排水機能を担っていた可能性があります。

調査区北端で石敷きが確認されましたが、参道に伴う近世の石敷と考えられます。

基壇跡1b・石列

②で確認された基壇跡1aは、参道の整地とあわせてさらに盛土で造成される等、改修された痕跡が確認できました。調査区南東部分で確認された東西方向に続く2条の石列は、基壇1aを踏襲して改修したものの(基壇1b)で、基壇の北端を区画する溝として機能していたと考えられます。溝からは江戸時代前期の陶磁器類が出土しました。この時期まで基壇1が改修されながら機能していたと考えられます。

④江戸時代中期

基壇2ab・地鎮痕跡・旧仁王門

③で確認された基壇跡1bを区画する石組の溝が廃止され、調査区全面にわたって新たに基壇2aの盛土造成が行われました。この整地層の中で地鎮痕跡とみられる遺物(土師皿2枚、寛永通宝12枚、元禄二朱判金、元禄豆板銀)が出土しました。基壇2aの地表で確認された礎石抜取穴は、現仁王門の前身にあたる旧仁王門の遺構と考えられます。地鎮行為はこの造成の過程で、門の中心軸付近で行われたものであり、旧仁王門の建立に伴う地鎮行為と判断しました。市内の遺跡から金貨・銀貨が出土したのは初めての事例です。この時埋納された二朱判金は、元禄10年(1697)に铸造が開始されたもので、旧仁王門はこれ以降の建立と考えられます。旧仁王門は現在の仁王門の建立年である明和4年(1767)までに失われたことになり、存続期間は比較的短期間であったことが分かりました。

旧仁王門の礎石抜取跡は、現仁王門の南北方向の柱通りとほぼ一致していますが、東西方向の柱通りは約3m南にずれています。よって旧仁王門は現仁王門より南側(崖側)に建っていたと考えられます。

旧仁王門と現仁王門は共有の基壇2aに建てられています。基壇が北側に一部拡大された痕跡(基壇2b)が確認できました。建替えの際に門の位置が北側にずらされたことによる基壇の拡張と考えられます。

柱列

この他、仁王門と直行する性格不明の柱列が基壇2aの地表で確認されました。旧仁王門建造前、もしくは旧仁王門から現仁王門に建替えられる合間の期間に、柵列等の施設が短期間設けられていた可能性が考えられます。

■まとめ

- ・ 今回の調査地点では平安時代初頭(9世紀)に整地され、土地利用が開始されたことが分かりました。
 - ☞ 松尾寺の創建年代を考える上で古代に遡る遺構が確認できたことは重要です。
 - ・ 平安時代後期にかけて基壇跡1が造成される等、境内の整備が行われたことが分かりました。
 - ☞ 鳥羽天皇や美福門院(鳥羽天皇の皇后)の庇護を受けて平安時代後期に伽藍が整備されたと伝えられており、今回確認された基壇跡はこのような平安時代後期の整備の一端を示している可能性があります。
 - ・ この基壇跡1aは改修されながら中世以降も引き継がれ、江戸時代前期頃まで基壇1bとして機能していたことが分かりました。
 - ☞ 室町時代の境内の様子が描かれている参詣曼荼羅には、仁王像が収められた山門が見えます(図版参照)。
- 境内の配置からこの山門は基壇跡1に建っていた可能性が考えられ、歴代の山門もこの位置に建てられ

ていた可能性があります。その後、基壇跡1b は南側の崖崩れ等で失われ、江戸時代中期に本堂寄りに位置をずらして旧仁王門が建立されたと考えられます。

- 中世から江戸時代にかけて、参道跡と推定される精緻な整地が繰り返されていることが分かりました。
- ☞ 特に中世以降に盛んになった西国三十三所巡礼の隆盛や、歴代領主等の帰依を受けて発展した松尾寺の歴史が整備の頻度からうかがえます。
- 今回の松尾寺初めての発掘調査では、9世紀頃に土地利用が開始されて以降、平安時代後期にかけて建物基壇が造られる等整備が進み、旧仁王門を経て現仁王門の建立に至る調査地点の一連の変遷を明らかにすることができました。西国三十三所の札所として発展し、今なお多くの巡礼者が訪れる松尾寺の歴史は舞鶴の歴史にとっても特徴的なものです。今回の調査を契機として、今後の調査研究による更なる松尾寺の歴史の全容解明が期待されます。

■参考

松尾寺

青葉山の中腹に位置する西国三十三所第二九番札所。真言宗醍醐派。本尊馬頭観世音。威光上人が和同元年（708年）に開山したと伝わる。正暦年間（990～995年）に春日為光が本尊馬頭観世音を造像したとされる。寺伝によれば鳥羽天皇、美福門院の崇敬厚く、伽藍および15の坊舎を再建したとされる。平安時代末には観音霊場としてすでに知られており、信仰をあつめた。近世には細川氏、京極氏、牧野氏ら歴代領主の帰依を受け、整備や修復が行われた。

松尾寺仁王門（府指定文化財）

三間一戸八脚門 規模：桁行（東西）約7.7m・梁行（南北）約4.5m、高さ約8.9m

建立年：明和4年（1767）【江戸中期】

市指定文化財の木造金剛力士立像一対を安置（現在は宝物殿に収蔵）

※仁王門は令和2～3年度にかけて解体修理中

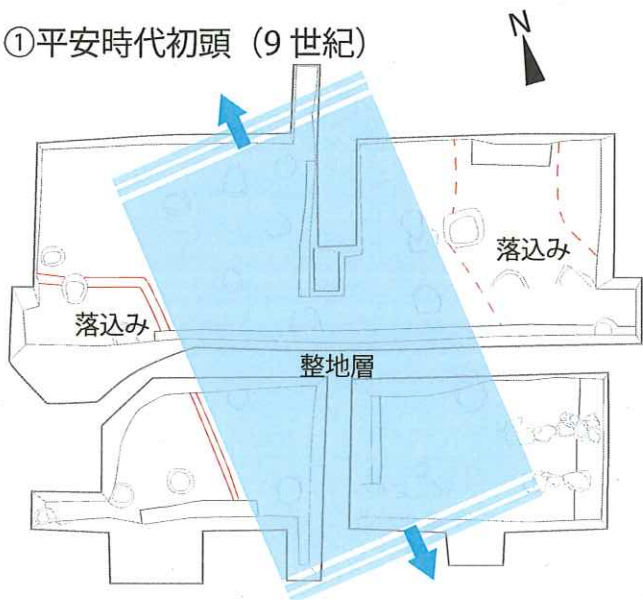


現仁王門



調査場所位置図

①平安時代初頭 (9世紀)



①西側落込み付近土器出土状況

②平安時代前期～後期

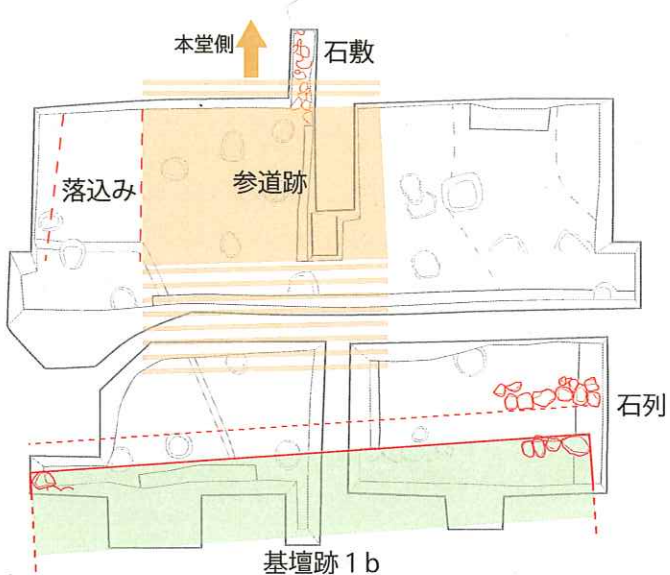


②基壇跡 1a の盛土と基壇北端の石列 (断面写真)



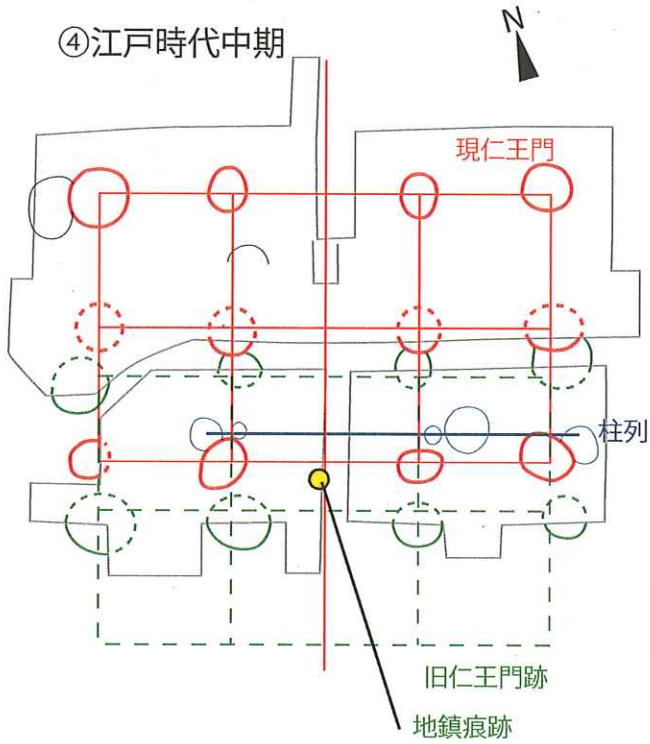
③中世の参道跡と推定される整地層と落込み (調査区北西部：南から)

③鎌倉時代～江戸時代前期



③基壇跡 1b (東から)

④江戸時代中期



④基壇跡 2a の盛土と旧仁王門礎石抜き取り跡、現仁王門礎石位置 (北から)

■主な出土遺物



平安時代の土器 (須恵器・土師器・黒色土器)



旧仁王門に伴う地鎮遺物
(土師皿 2 枚・寛永通宝 12 枚・
元禄二朱判金・元禄豆板銀)

松尾寺参詣曼荼羅 (室町時代)



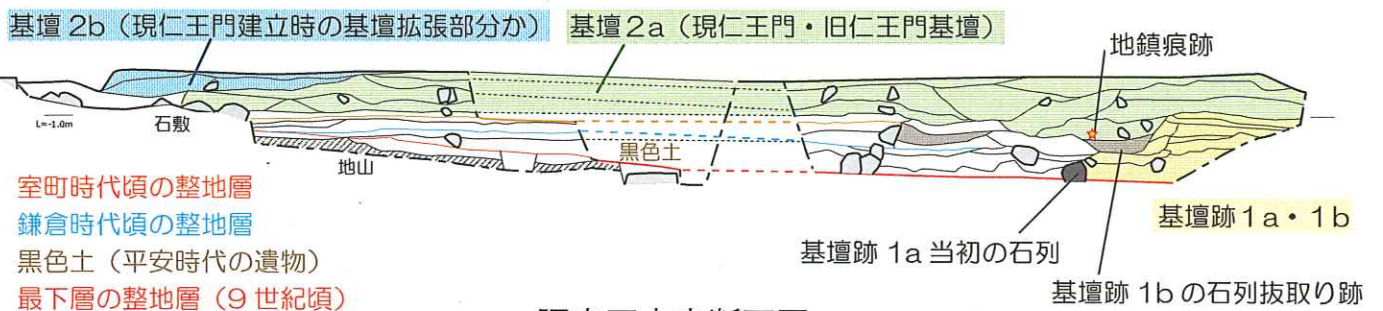
← 本堂側

→ 参道側

断面図

0 1/50 5m

調査区全景



調査区中央断面図